日本ＣＩ協会刊「マクロビオティック誌」連載「桜沢如一のコトバに学ぶ」

第一回目　「ミクロビオティックを超えて」

寺子屋ＴＡＯ塾代表　波多野毅

「食養は食事の規則を教えるものだと思っている人があります。大きな間違いです。食養は金ピラや、大根や人参やコブや半つき米を食べることだと思っている人があります。馬鹿ですな。食養は砂糖や菓子や果物を食べないことだと思っている人があります。ボンヤリですな。食養とは、何を食っても（好きなものばかり食って)決して病気にならず、毎日毎日を力強く、(何の心配もなく）楽しく暮らしながら、何かしら残る仕事を仕上げることなのです。それは神を知ることであり、神を生きることであり、神に生きることであり、神にかえることであり、神を不断に念うことであり、慈母を慕う幼な子のように、大自然―絶対無限―を賛嘆することなのです。」（食養人生読本）

私が、鍼灸学校の学生だった八九年、知人に薦められて初めて読んだ桜沢如一の本が「食養人生読本」だった。正直、新興宗教的アジテートを感じ、「アク」のある語気の強さに辟易した記憶がある。しかし、あれから二十年、彼の魂の乗っかった珠玉のコトバは私を鼓舞する「アジ」ある文章へと変わった。ミイラ取りがミイラになってしまったのだろうか？

否、桜沢はどこまでも「ノンクレド＝信じるな」と言う。彼は、外在する固定的教義に盲信するのではなく、実践を重んじ、時に失敗しベソをかきながらも身をもって感得していく「己こそ己のよるべ」の道を説いた。

昨今の逆輸入マクロビオティックブームからファッションマクロ、ブルジョアマクロが蔓延している。もはや「スロー」も「ロハス」も「マクロビ」も記号化されてしまった。美容も健康も大切な一里塚だが、その先の先の先こそ「マクロ」を冠するマクロビオティックの真骨頂なのだと思う。得てしてマクロビオティックがミクロビオティックになっている先生や生徒も多い。これこそ桜沢が嫌った「教育」が生み出す弊害であろう。自戒を込めて、桜沢のコトバに独立自由人へのヒントを学んでいきたいと思う。（８００字）

著者プロフィール　波多野毅（はたの　たけし）寺子屋ＴＡＯ塾代表・食育エコロジスト
１９６２年、熊本県阿蘇郡小国町生まれ。法政大学社会学部卒業後、信州諏訪の学育塾にて堀田俊夫氏の下でＫＪ法などを研鑽。祖母の死がきっかけで東洋医学・ホリスティック医学に興味を持ち、東洋鍼灸専門学校にて鍼灸指圧の資格を取得。その間、日本ＣＩ協会、大阪正食協会にてマクロビオティックを学び、93～94 年アメリカの Kushi　Institute にてスタッフとして働く。 帰国後、故郷小国町に「TAO 塾」を創設。寺子屋塾の仕事の傍ら、時に鍬、時にペンを持つ生活。 教育・健康・環境に関する様々なプロジェクトを推進しながら、国内外の研修生を数多く受け入れている。その活動は辻信一著「カルチャークリエイティブ～新しい世界を作る５２人」（ソトコト新書）やＮＨＫ金曜リポートＬＯＨＡＳ特集などで紹介された。現在、NPO 法人パーマカルチャーネットワーク九州理事、熊本県地球温暖化防止活動推進センター理事。 著書に「医食農同源の論理～ひとつつらなりのいのち」（南方新社）などがある。モットーは「阿蘇びをせんとや生まれけむ！」